

聖書:ルカの福音書6章12~26節

説教:貧しい人たちは幸いです

はじめに

パリサイ派と呼ばれる宗教グループが出てきたのには、彼らなりの事情がありました。イスラエルが捕囚という苦しみを味わい、国を失ってしまったのは神から離れてしまった罪のためだった。だからもう一度最初の信仰に立ち戻らなければならない、そのような純粋な動機でスタートした。ところがその思いが強すぎたということでしょうか、あまりにも原理主義的になってしまいます。たとえば、モーセの律法には「安息日には、いかなる仕事もしてはならない」と書いてあるのだから、どんなにお腹が空いても畑で穂を摘んではいけないし、いのちに関わる病気は別として、それ以外の病気については安息日に治療してはいけない。もししたならそれは労働とみなされるから安息日規定に違反する。このようなことを人々に教えていた。そんなパリサイ人たちが見ている目の前で、イエスは安息日に右手の萎えた人をいやしたのですから、大変なことになる。6章11節にあるように「彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合い始めた。」ここからイエス殺害計画がスタートします。

イエスはこのような緊張が高まっていく雰囲気の中で、今日のところにあるように十二人の使徒をお選びになり、福音をお語りになります。

1 十二使徒を選ぶ

1) なぜユダが

ここでまず誰もが不思議に思うことは、イエスを裏切っていくユダをお選びになったことでしょう。イエスはそうなることを予想できなかったのか。もちろんそんなことはない。知っておられて選びます。ではなぜそうされたのか。いろいろな人たちが考えてきましたが、はっきりとわからない。

そういうときは別の視点から見た方がよい。なぜこのタイミングで、イエスは十二使徒を選び、ユダを選んだのか。そう考えてみましょう。先ほどもいいました。パリサイ人たちがイエスを殺害しようとする具体的に動き始めたまさにその直後にユダを選んでいきます。ユダはやがて、パリサイ人たちの仲間である律法学者や祭司長たちにお金と引き換えにイエスの居場所を教えて、イエスが十字架にかけられるための決定的役割を果たします。これは決して偶然ではない。イエスは最善のタイミングでユ

ダを選び、ご自分の十字架への道をより確かなものにされた。そのように言うことができます。

2) 時間：夜が明けると

それだけではない。もう一つ大切なことがここに書かれています。イエスがユダを選んだ時間帯のことです。「夜が明けると」とある。なぜこのときか。これだけでは分からないのでとりあえず先に進むと17節にこうある。

3) 場所：山から平地へ

「それからイエスは彼らとともに山を下り、平らなところにお立ちになった。」先ほどは時間が夜から昼に変わったときとありました。そしてここでは場所が山の上から平地に変わります。このことにも何か意味があるのか。そのことは最後のところで触れます。

2 貧しい者と飢えている者

1) 貧しい人たち

イエスが山から下って来ると、大勢の人たちがイエスのことばを聞きたい、病をいやしてもらいたいと願って押し寄せてきます。そんな中でイエスは、誰もが知っている有名なフレーズを語ります。20節。「貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」

ここで考えなければならないのは、「貧しい人たち」とは誰のことか、です。マタイの福音書の並行箇所には「心の貧しい者」とあります。日本語で「心の貧しい人」とは、心が狭いとか、自分勝手であるとか、人間としての良識に欠ける、そんな意味ですから、辻褄が合わなくてますます混乱します。

そこでこう言い換えてみたらどうでしょうか。人間は、どんなに健康でも空気がなくなったら数分で死にます。それだけ空気は人間にとって絶対になくってはならない。それと同じように、心あるいは霊という領域においても、これがなければ死んでしまうものがある。ここで言われる「貧しい人たち」とは、本当に必要なものが自分にはないと気がついて苦しんでいる人たち。空気がないと死んでしまうように、心も死んだような状態になっていると感じている人たちのこと。そう言い換えることができる。

では心にとって必要不可欠なものとはなにか。それはお金だと考える人がいます。この世の称賛や誉れ、地位や名誉だと考える人もいます。しかし、それらは本当に私たちに満たすことができるのか。ある方は、そのようなものでは絶対に満たされない気がつく。そうなると思えば、堪らないう。実はここにお座りの皆さんは、どこかでそういうことを思ったので、あるとき教会の門をくぐったのではないですか。

2) 天の御国はその人たちのものです

このような人たちにイエスは言われる。「天の御国はその人たちのものです。」このことばは二つのことを語っている。一つ、死んでしまったような心をもう一度生き返らせ、満たすもの、それが天の御国である。

そして二つ目。イエスはこうは言いませんでした。「天の御国はその人たちのものとなるでしょう。」「その人たちのものになるかもしれない。」そうではなくてこう言われた。「その人たちのものです。」すでにその人たちのものとなっていると断言している。ということは、私たちの目には見えないかもしれないけれど、いま既に存在している。いまは実感がなくてもいいけれど、既に天の御国に私たちは迎えられている。だから、あなたがたは幸いなのだということです。

3) いま飢えている者がどうして幸いなのか

では21, 22節はどうなのか。飢えている人が、いますぐお腹いっぱいのご飯を食べられるのか。泣いている人が、いますぐ笑うようになるのか。でも現実とは全然違う。これはいったいどういうことか。ここは少し説明が必要です。イエスは、いますぐにとは言っていない。天の御国は既にあなたがたのものとなっている。けれども、飢えている人は、やがて満ち足りるようになる。それはいまではなくて先の話。泣いている人が笑うのも、同じく未来のこととして語っている。

でもそれでは遅すぎるという人もいます。毎日、たくさんの人たちが餓えて死んでいく非常に貧しい地域に派遣されたある宣教師は、こう叫んだそうです。「どうして神はこの石をパンに変えて人々に与えようとしませんか。神は何をしているのか。」いま目の前に苦しみながら死んでいく人たちがいるのに、いま飢えている人たちは幸いですと、どうして言えるのか。切実な疑問です。イエスはこのような疑問にどのようにお答えになるのでしょうか。

4) 人の子のゆえに

22, 23節。「人々があなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。その日には躍り上がって喜びなさい。見なさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。彼らの先祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。」

このことばは、さきほどの疑問の答えになっているのでしょうか。迫害されることを喜べ。それはそれで大変なことですが、いま目の前で死んでいく人たちがいるということに対して、神は具体的にこうしますということは一言も書いていない。神は全然答えていないように見える。

でもどうでしょうか。22, 23節には、「人々があなたがたを憎むとき」とありますが、これはそのままイエスが受けた苦しみそのものです。人々は人の子であるイエスを排除し、ののしり、悪しざまにけなし十字架に追いやりました。神は何もしないのではない。むしろ率先して、私たちの苦しみを背負ってくださった。それはわかるとしても、それがどうして貧しい者の幸いとなり、いま飢えている者、いま泣く者の幸いとなるのか。そこが結びつきません。

3 見えるものと見えないもの

1) 夜から昼へ、山から平地へ、いまの時から先のことへ

最後にその疑問を考えます。今日の箇所がどんなふうにかかれてあるのか、もう一度整理します。イエスは夜通し祈られ、夜が明けて明るくなったときに十二人を選び、裏切る者ユダを選びました。その後、イエスは場所を変えて山を降りられて平らなところに立ちます。そしてイエスが語ったことは、いま既に天の御国はあなたがたのものとなっているけれど、しかし満ち足りることと、笑うようになることは未来のことである。こんなふうに夜と昼、山と平地、現在と未来、ぜんぶ二つの対照的なことばで書いてあることに気がつきます。

2) 見えないものを信じる

このことばでいったい何が言いたいのでしょう。イエスはパリサイ人たちの憎しみとユダの裏切りによって、十字架へ追いやられます。それはここで言えば夜と山に象徴されていると言ってもいいでしょう。しかしこの世界はそれだけなのか。

例えば、あしたの朝、太陽が東から上るだろうかと心配する人がいますか。だれもいません。いまは夜で外は真っ暗でも、朝になれば必ず太陽が昇って来るとだれもが疑わない。山に登ったときもそうです。山の上からは平地が見えないから、平地がなくなったと言う人はだれもいない。たとえ肉の目には見えなくても山を下れば平地に戻れると誰もが疑わない。だから安心して山に登るわけです。

それと同じように、いまは悲しみの中にあるかもしれない。いまは飢えているかもしれない。しかしそれで終わるのではない。なぜならあなたはすでに天の御国に入れられているのだから。必ず夜が終わって朝が来るように、山から下りれば必ず平地があるように、それと同じように、あなたはやがて満ち足りるようになる。涙は拭い去られて笑う者となる。そのことを信じなさい。そう言っているのです。

でも、まだ見ていないこの先のことをどうして信じられるのでしょうか。神は何をされたのかを見てください。わざわざご自分を裏切ることがわかっているユダを選びました。わざわざパリサイ人たちが怒るようなことを人々の見ている前でなされ、十字架におつきになり、そこで死なれます。もしそこで終わったなら何も希望はない。ところが、「天においては報いは大きいのです」とイエスは言う。どうしてか。三日目に墓からよみがえったからでしょう。死の先にあよみがえりのいのちを信じて疑わなかった。

しかし世の中には、目に見えるものだけがこの世界のすべてであると思っている人たちがたくさんいる。そんな人たちに、イエスはこう言って警告します。「富んでいるあなたがたは哀れです。」「いま満腹しているあなたがたは哀れです。」「いま笑っているあなたがたは哀れです。」「もちろんお金持ちは救われなとか、腹一杯食べてはならないとか、笑ってはいけないと言っているのではない。むしろ逆です。たとえお金に不自由がなくても、食事に困ることはなくても、顔では笑っていても、でも実は心が満たされないという思いでひとり苦しむ人がいる。もしそうであるなら、間違いなくあなたは天の御国にいる。

このように語ってくださる主の恵みに感謝しつつ歩んでまいります。